

獣医師とウサギと学校と

物延 了† (神戸市獣医師会学校飼育動物担当理事・ライフ動物病院院長)

もう四半世紀も前のことになろうか、長女が幼稚園に上がる前、1羽のウサギをいただいた。娘は“ウサギのお母さんになる”のがその頃の夢だったので、早速ウサギ小屋の製作に取り掛かった。半日がかりで四方を金網で囲った小屋を作り、大量の青草と共にウサギをその中に入れた。ウサギに水を与えるてはならないというのは迷信で、飲み水は与えるべきであることは、少なからず理解していた。餌は主にパンと家で余った野菜であった。ところが6カ月ほど経った頃、運動のため庭に放している間に脱走して、そのまま帰らぬウサギとなってしまった。長女は嘆き悲しみ、空のウサギ小屋が、家の裏にぼつんと残された。1年ほど経って、幼稚園から新しいウサギをいただいたが、数カ月後に前のウサギと同じように脱走し、やはり帰っては来なかった。今度は3歳の次女が餌をやり、鍵をかけ忘れたのであった。こうもウサギが居付かないということは、私は元来ウサギとは縁がないのだと思った。

それから長い年月が経過した。我が獣医師会主催の研修会に、中川美穂子先生（現 日本獣医師会学校動物飼育支援対策検討委員会副委員長・全国学校飼育動物研究会事務局長）をお招きし、学校飼育動物への関わりについての講演を拝聴した。何のために学校で、ウサギやニワトリが飼われているのか、学校における飼育動物の現状、そして学校獣医師制度について、さっぱりとした口調で、はっきりと語られた。獣医師でありながら、今まで何も知らなかった自分が恥ずかしく思われ、また先生の話が新鮮で心に滲みた。平成12年3月のことであった。

当時、神戸市内の学校に飼育される動物の診療は、個々の動物病院に持ち込まれるが、診療費は無料や割引であったり、通常の診療と同様であったりと、獣医師の考え方により様々であった。おそらく全国的にも、一部の先進的な地域を除いては、同様の状況であったと思われる。私も、勤務医時代の院長の考えをそのまま継承して、学校飼育動物の診療費は無料にしていた。それまで近隣の小学校からも、ウサギの診療依頼は何回かあった。確か皮膚糸状菌症の治療だったかと思うが、10日間の飲み薬を出したところ、土日は休みなので、投薬な

どできないと言われた。無料で治療しているのに何事かと思ひ、つい強い口調で“病気に休みなんか無いよ!”とたしなめたところ、若い女の先生の顔が一気に曇ってしまい、ぶつりと来院しなくなった。学校の先生は、獣医師に注意を受けることを嫌い、診療費が高ければ支払に苦慮するし、無料であれば気兼ねする。飼育している動物が病気や、過剰繁殖してしまった時でも、学校が動物病院に行くのに二の足を踏むのは、そんなことが原因であることなど知る由もなかった。敷居の高い動物病院に、意を決して病気のウサギを連れて行った挙句、“毎日欠かさず投薬しろ。休みに投薬できないなどというのは、人間の都合である。”などと偉そうに言われたら、2度と行きたくなくなるのは当然であろう。

そのような折、神戸市獣医師会の中に、組織立てて学校飼育動物の飼育支援を行おうという動きが出てきた。“神戸市学校飼育動物相談指導モデル事業”という何とも長い名前の事業が開始された。“手伝ってこないかな”という先輩の誘いに思わず“はい”と答えてしまった。選ばれた5校のモデル校をそれぞれ3名の獣医師が担当し、1年に3回、飼育指導を行ったり、ふれあい教室を開催して、子供たちに動物の習性などを教え、実際に心音を聴かせたり、抱き方の指導を行う。そして、必要であれば不妊手術も行う。そんな内容であるが、初年度から学校は大変喜んで受け入れてくれた。ただ、残念なことに教育委員会からの予算が付かず、事業費は保健福祉局の予算を一部振り向けることで賄われた。

物延 了

—略 歴—

- 1979年 酪農学園大学酪農学部獣医学科卒業
- 同 年 道南農業共済組合今金家畜診療所勤務
- 1984年 兵庫県和田山家畜保健衛生所勤務
- 1997年 ライフ動物病院を開設
現在に至る



† 連絡責任者：物延 了 (ライフ動物病院)

〒651-2132 神戸市西区森友5-130 ☎078-926-6422 E-mail : ryoh@life-ahp.com

2年目、3年目と回を増すごとに、飼育環境の改善が図られる学校の数は増加していった。学校を訪問する度に、校長や担当の先生から何度もお礼を言われ、年度の終わりには、子供たちから心温まる手紙をもらい、目頭が熱くなった。この調子で行けば、10年もすると神戸市内の小学校は、見違えるような飼育環境になっていくだろうと思っていた。ところが、何年経っても過剰繁殖する学校は、減っていかない。そのうち、数年前に飼育指導した学校からも、ウサギが増えすぎて困っていると相談が来る。担当教諭が転勤し、子供たちも卒業してしまえば、また元の状態に戻ってしまう学校も多いのである。広く知識を普及するため、教職員対象の講習会も毎年開催してきたが、成果が上がっているようには思えない。こんな“モグラ叩き”のようなことを続けていても仕方がない。何とかしなければ、と思いつつ数年が経過した。

選定された数校のウサギだけ不妊手術を行うのでは、同じことのくり返しである。そこで過剰繁殖や、疾病発生の危険性がある学校を早期に発見するために、3年前から市内全166校に対するアンケート調査を始めると、学校における我々獣医師のニーズが、おぼろげながら見えてきた。そのデータを基に、教育委員会に予算化の必要性を訴え、何とか今年から、教育委員会の予算で活動できるようになった。事業費の幅が広がったお陰で、治療も不妊手術も気兼ねなく依頼してもらえる。獣医師と学校との距離が、ぐんと近くなってきたような気がする。

予算獲得まで、本当に長い期間を要したが、究極の目標である「学校獣医師制度」の確立までの間、一度は縁がないと思ったウサギとは、どうやらまだまだ縁が切れそうにない。